

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

学校番号	1366718
学校名	日本聾話学校

1. 活動テーマ

〈テーマ〉 4歳児 … 泡で遊ぼう

〈テーマ設定の理由〉

本校幼稚部では、幼児の関心や実態に応じ、一つのテーマのもとに一定期間活動を行う「トピックス」の時間を設けている。活動を通し、繰り返し同じことばを聴く機会となり、それがことばの成長にもつながっていく。

泡はお風呂や手洗い、食器洗い、シャボン玉遊びなど、子ども達の生活になじみがあり、自然に触れる存在である。また、その感覚や不思議さに夢中になりやすく魅力的である。楽しい活動を通し、子ども達が「聴きたい、伝えたい、もっとこうしたい」という思いを持って遊ぶことを願い、このテーマを設定した。

まず、クラス全員でシャボン玉をして思いっきり遊んだ。後日、その時のことを写真を見ながら振り返った。そこには、「いっぱい！」と泡がいっぱいになったシャボン玉の写真に目を奪われた子ども達の姿があった。そこで、教師の方から「こんな泡だらけのシャボン玉、また作れるかな？」と、透明なプラスチックのコップに少量のシャボン玉液を入れ、ストローで吹いて泡立たせる活動を提案し、みんなでやってみることにした。泡立った泡を見た子ども達が、「もっと泡を作りたい」「触ってみたい」「遊んでみたい」という思いになり、今後の泡遊びへの興味関心や意欲を高められたらと願ってこの活動に取り組んだ。

2. 活動スケジュール

令和6年6月下旬から中旬にかけ、クラス活動の時間(トピックス)で連続7回行った。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- ・シャボン玉液 ・ストロー ・プラスチックのコップ ・たらい ・ブルーシート
- ・スポンジやボディタオル ・水

4. 探究活動の実績

〈活動内容〉

7回の実践のうち、報告書では1回目を中心に取り上げる。

- ・前回の活動の写真を見て、みんなで振り返る。泡がたくさんあることに興味をもつ。
- ・まずは教師がプラスチックのコップの中のシャボン玉液をストローで泡立たせ、その時に気付いたこと(音や形を含む)を伝え合う。
- ・1人1つずつシャボン玉液の入ったプラスチックのコップとストローを持って、「せーの、ふーっ」と息を吹き込み、たくさん泡を作る。その時に気付いたことを友だちと伝え合う。
- ・「もっともっと泡立てたい」という子どもの声が出てきたところで、1つのたらいにみんなでたくさん泡を作る活動をする。ブルーシートを敷き、スモックを着用する。たらいにシャボン玉液と水を入れ、それぞれが家庭から持ってきたボディタオルやスポンジで泡をたくさん作る。たらいは、クラス7人で1つとする。

〈活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり〉

〈教師がストローで泡立てた泡を見て〉

C:「キャー。(子ども達の笑い声)」
 T:「何に見える？」
 C1:「泡がいっぱい」
 C2:「かき氷みたい。」
 C1:「ジュースみたいになってる。」
 C3:「やりたいなあ」
 T:「やりたいよね、やってみる？」



〈それぞれがストローをふいて泡を作る〉

C3:「できたー。」
 T:「できた？」
 C 口々に:「できたー。」
 C4:(シャボン玉液が口に入る)
 T:「大丈夫？ガラガラペツしておいで。」
 C2:「できた、うちでもやってみよう！」
 C2:「わたがしみたい！」
 C5:(大きい泡を作る。そこに空気を吹き込む面白い吹き方をしている)
 T:「C5の泡、大きいね」
 「みんな泡がいっぱい。大変。あふれてきそうだね」
 C2:「ねえねえ、大人が飲むやつ(ビール)みたい。」
 T:「いっぱいになってあふれてきてみんなの手にもついてきたから、一回洗面器の中にこれいれてみようか」
 C2:「いっぱいになった。」



5. 振り返り

〈ふり返りによって得た教師の気づき〉

- ・まずは、教師がストローをふいて泡立てることをやってみせたことで、子ども達の「やりたい」という気持ちが大きく膨らんだ。また、プラスチックのコップから泡があふれそうな様子を見て、息をふきこむことをセーブしている子ども達であったが、全員のシャボン液を洗面器の中に合わせたことで、「ふーっ」と、息を吹き込もうという発言があり、「もっと泡立てたい」という思いが強くなってきていると感じた。
- ・ストローに息を吹き込むという活動を自分で楽しむことをねらいとしていたが、ねらいによっては、「一斉にやる」よりも「一人ずつやる」「少人数ずつやる」という展開にすることで、自分と友達を比べてことばにするきっかけが生まれやすくなるかもしれない。
- ・活動の場面、場面で泡の立ったコップを「〇〇みたい」と、見立てて表現する感性豊かなS君の姿があった。教師はその思いをくみ取ってもう一度ことばにし、共感するだけにとどまってしまうが、「みんなに言ってごらん。」と返すことで、気づきを友達みんなと分かち合える場面がもっと生じたのではないかと思った。
- ・コップにストローで泡立てている時に、G君は、膨らんだ泡にストローをさしてよりふくらまそうとしていた。教師はそのことに気付いたが、子ども達みんなとその面白さを共有する場面を設けなかった。1人1人が泡立てた泡を見合い紹介する時間を設けたら、もっと子ども同士の生きたやりとりが活発に行われたと思う。
- ・教師の気持ちにゆとりがなく、口に液が入ってしまったK君に対して個人的な対応で口をすすがせに向かわせたが、ハプニング的な出来事を受け止め、楽しみ、みんなで共有することで生きたことばに出合うきっかけとなることに気付いた。
- ・五感を使い、思いきり泡遊びをした経験は自然に生活の中につながっていくであろう。近年、生活の中で触れるものが少なくなっているため、幼児期にたくさん経験させることを大切にしたいと思った。今回の活動を子ども達と共にする中で、次回泡をたくさん作って思いきり泡遊びを楽しみたいという気持ちになった。